郡山青年会議所報 Junior Chamber International Koriyama

vol. 617

LINK

JCI

公益社団法人郡山青年会議所 2025年度スローガン

Bridging the future

～希望をつなぎ、郡山の未来を創ろう～

特別対談

尚志高等学校サッカー部 監督 仲村 浩二 様

佐久間悠治理事長（以下、佐久間）

本日はお忙しいなか、貴重なお時間をいただきまして誠にありがとうございます。本年度は郡山青年会議所理事長所信の中で「つながりを通してこの街をよりよくしたい」をキーワードの一つとして掲げております。サッカーを通して福島を盛り上げ、地域に根ざした活動を行う尚志高等学校サッカー部監督の仲村様と「組織と地域との関わりについて」というテーマで対談をさせていただければと考えております。仲村様は、尚志高等学校サッカー部監督をされて二十七年とお伺いしました。今の尚志高等学校サッカー部（以下、サッカー部）の全容や目標についてお話をお聞かせ願います。

尚志高等学校サッカー部監督仲村浩二氏（以下、仲村）

私たちの目標は「全国制覇」です。絶対に全国で優勝したいという思いを持ってサッカーに向き合っています。全国高校学校サッカー選手権大会（以下、選手権）で二回、全国高等学校総合体育大会（インターハイ）で一回と計三回ベスト四に進んでいますが、優勝というゴールを達成していません。この目標を二〇二七年までに成し遂げたいと思っています。チームがさらに強くなっているなかで、地域との関わりが今後より一層必要になってくると感じています。また東日本大震災後、運動ができない環境下で運動不足から小学生の肥満がとても問題視されるようになりました。震災後、校内のグラウンドが人工芝に変わり、その環境を利用して子どもたちがのびのびとサッカーができるサッカースクールを立ち上げました。その後、中学校のジュニアユースと小学生のジュニアを設立しました。尚志高等学校だけで一貫した指導を行い、サッカー部を強くしていくことを目標に活動しています。

佐久間

ありがとうございます。私自身も小学校からサッカーを続けていて、強いだけではなく、まずは人間性を育むように指導してもらった記憶があります。仲村様が二十七年間サッカーを指導してきて子どもたちの接し方について少しずつ変化していると思います。現在指導するにあたり、大切にされていることをお聞かせください。

仲村

一番大切にしていることは、「選手たちが卒業してからもサッカーに携わるよう指導すること」です。高校から大学へ進学する時、大学から社会人になる時とさまざまな理由でサッカーを辞めてしまうことがいつの時代もあります。サッカー部の選手はサッカーが大好きで、一番の目標はプロサッカー選手になることです。Ｊリーグで活躍する選手や海外で戦う選手を輩出するようになり、今後もそのような選手を輩出するのが目標ですが、私のように教員としてサッカーを教えるという方法もあります。また、父親になって子どもにサッカーを教えたり応援することも、サッカーの醍醐味だと思っています。プロサッカー選手だけでなくＪリーグの各チームでスポーツトレーナーや通訳、映像分析を行うアナリストなど様々な分野でサッカー部ＯＢが活躍しており、交流が図れるというつながりをとても大事にしています。また、私を含めたスタッフは組織の一員であり、毎年メンバーも変わります。スタッフ全員が「全国制覇」という同じ目標に向かうことはもちろんですが、生徒たちを成長させるというもう一つの目標にも向き合わなくてはなりません。今の生徒たちは理解しないと動かないのが特徴だと思います。このトレーニングが目的に沿っているかどうか理解しないとなかなか動きません。幸い、サッカー部は全員が「全国制覇」という目

佐久間

標のために全国から集まって来ていますので、皆で困難に立ち向かいます。

私も理事長として組織を率いるようになりビジョンを掲げることは、とても大事だと思います。「全国制覇」という大きなビジョンがあり、そのためにチーム一丸となり行動していくのだと思います。仲村様のお話から、「全国制覇」という目標を掲げて行動することは大切なことであると感じています。私たちも今年は「つながり」をテーマに活動をしており、当青年会議所の現役会員が六十九名に対し、OB会会員が約四〇〇人います。先輩方の経験談などは勉強になりますので、今後もつながりを大事にしたいと感じています。私自身もこの地域のために何か恩返しをしたいという想いがある中で、仲村様のように地域で活躍されている方の活動に私たちがご一緒させていただくことで、この地域がサッカーというツールを通して何かおもしろい変化を起こせるのではないかと期待が高まっています。今の子どもたちは「理解しないと動かない」と仰っていましたが、まさしく私たちの組織もそうであると思っています。例えば、社員であれば給料が発生することで動きますが、青年会議所は給料などが発生するわけではありませんので、理事長の想いや考えでメンバーを導くことがとても大切な要素になります。また、部活動と同様に私たち青年会議所も単年度制を用いており、役割が毎年異なります。新チームになった時、メンバーへの声掛けや接し方など意識していることなどございましたらお聞かせください。

仲村

新チームになるとスローガンを最初に掲げるのですが、今年のスローガンは「下剋上」です。サッカー部は強豪校と呼ばれるが故に、常に勝利を求められる宿命にあります。ここ数年の選手権全国大会では一、二回戦で負けてしまうというのが多く、昨年までは高円宮杯JFAU-十八

サッカープレミアリーグ（以下、プレミアリーグ）に所属していましたが、今年度は降格してしまいました。今年はプレミアリーグに戻らないといけない、やらないといけないという状況の中で、スローガンに掲げた「下剋上」がチームのモットーです。一昨年トップチームがプレミアリーグに昇格した時も、セカンドチーム、サードチームなど各カテゴリーに各々のスタッフが監督としているため極端に弱くなることがありません。昨年高円宮杯JFAU-十八サッカープリンスリーグ東北で活躍した選手たちが今年三年生になったため、スタートダッシュとして東北高等学校新人サッカー選手権大会で優勝することができました。二〇二四年開催のU-十六ルーキーリーグでも全国二位になっているので、繰り返しになりますが二〇二七年までの三年間で全国制覇することを目標にしています。

佐久間

そのようななかでスタッフに対しては、どのような声掛けやビジョンを見せているのでしょうか、お聞かせください。

仲村

スタッフには私がやりたいサッカーをきちんと理解してもらいます。サッカーに正解はなくさまざまな考えや指導方法があると思いますが、私は自分の陣地から繋いで相手を翻弄しながら進んでいくという戦術を大切にしています。勝ちにこだわるのも大事ですが、サッカー部はそれだけではないものを創造しようと日々練習しています。個人的にはこの様な環境下でプロの選手が育てば良いと思っており、スタッフにはそのように働きかけています。ただ教員スタッフや学校で採用されている スタッフは、給料の面まで私では関われません。寮職員などは給料が十分ではなく悩みを抱えているスタッフもいるので、副業などを取り入れることでスタッフがもっと安定した給料をもらえないかと試行錯誤しているところです。そのようなかでもスタッフは文句を言わず、本当に頑張っています。あるスタッフは、「仲村監督を全国制覇させる目標を持って活動しています」と伝えてくれました。そういうことも含めて本当にありがたいなと思います。

佐久間

ありがとうございます。仲村様はプロで活躍されて経験値がとても高いので、選手がミスしたときに、キーワードを伝える事で、選手自身に考えさせて結果につなげるという指導方法に感銘を受けています。私も組織を率いるなかでメンバーに答えを容易く教えてしまうと、そのなかでしか動かないと考えています。仲村様はキーワードとして「楽しめ」という言葉を使用していました。選手が自ら考え、用意した答えではない新しい答えを導き出したり、よりグレードアップしたものが生まれる可能性を秘めていると思います。「楽しめ」という言葉は、どういったきっかけのなかで生まれたものだったのでしょうか。お聞かせください。

仲村

楽しめないと良いプレーにつながらないと思います。そしてサッカーが楽しくないと辞めてしまいます。そういったことも含めて「サッカーを楽しもう」というのが私の信念です。私が選手たちに伝えることは自ら考え工夫して行動しようということであり、結局考えるということがないと受け身の状態になり、選手たちの成長につながらないと考えています。サッカー部には新入生で世代別日本代表を経験した選手やJリーグの下部組織に所属していた選手が入ってきます。地元のクラブチームでプレーしていた選手たちは、劣等感を抱いたりしていますが、経歴などを度外視し、選手自身がどれだけ努力するのかを私は見ています。そのため、三年生になった時に自分で考えて工夫して行動することをやり続けた選手が最終的に試合に出場しています。キーワードを与えたら能動的に活動する選手と、何から何まで教えてくれる環境にいることで、自分で考える力が乏しくなる選手では顕著に差が出ます。今現在はスタッフが手取り足取りサポートしてくれますが、プロの舞台に行ったら試合に出ることが給料に直接結びつきます。ピッチにお金が落ちているとよく言われますが、自分自身でどうやって表現するか、考えて工夫して努力しないとトッププロにはなれません。日本代表など上のカテゴリーに行くほど、自ら工夫して考えた表現が重要な部分になると考えます。

佐久間

ありがとうございます。私自身も仲村様が仰る「考えて工夫して行動すること」が非常に重要であり、組織運営や会社経営も一緒だと考えます。私たちの組織は経営者が多く所属しており、会社で叱られる機会はほとんどありません。しかし当青年会議所は会社の肩書など関係なしに人から叱っていただくこともあり、私自身はそのことが成長につながると思います。そのような組織が私自身は必要だと思っていますし、たくさんの方とお話しするなかで、教育の重要性を常日頃感じています。私自身、小学生の子どもがいますが、私たちが地域のために何ができるのかと考えた時、高校生や大学生にロールモデルとなる人材を輩出することが大事だと思います。仲村様が指導された選手のなかには、現在海外や日本のトップリーグで活躍している選手も多くいるかと思います。そのようなロールモデルを作られたのが非常に興味深いです。彼らを育てるにあたり、心掛けたことをお聞かせください。

仲村

私が育てたというよりも先輩方が尚志高等学校を少しずつ強くしてくれた過程のなかで、そのようなプロ選手たちが通り過ぎて行ったというだけの話です。先輩方が築き上げてきてくれたものを一緒にやらせていただいた結果、プロになれたということです。私は「勝利の女神は細部に宿る」という言葉が好きで、トイレ掃除もその一つという話を選手にしています。現在ドイツのプロリーグで活躍するチェイス・アンリ選手から選手

権福島県大会の決勝が終わった後に「先生、毎日寮のトイレを掃除していました」と言われ、とても驚きました。「先生が言ったように毎日トイレ掃除をしていたら、こうやって神様がチャンスをくれました」の言葉通り、劇的な決勝ゴールをあげました。アンリ選手はご両親からスタッフの言うことを信じてやりなさいと常に言われており、素直に実行していたことが一流プレーヤーになれた証だと思います。今もよく電話をくれますが、メンタルを保って自分でやっているのは本当に素晴らしいことだと思います。

佐久間 素直で居続けることはとても大事だと思います。チャンスはたくさんあるかもしれませんが、その目の前のチャンスを掴めるかがとても大切です。その選手は実直にやっていたからこそ、チャンスをものにしたのだと思います。

仲村 本当に素直さが、成長にとって一番大事なことだと思います。素直な選手が一番伸びます。

佐久間 私たちがどんなに良い種をまいても、土壌が備わっていないと良い芽は育ちません。こちらの言葉掛けも含めてですが、やはりいかに良い土壌を作ってあげられるかはとても大事だと私は思います。だからこそ、私たち組織は地域をどう作って行くかを考えることが必要不可欠です。子どもたちのなりたいロールモデルの選択肢をたくさん作りたいと私自身も思いますし、組織としてもそうしていきたいです。仲村様も震災後、スポーツを通じてさまざまな選択肢を作られています。一人ではできないことを誰かと一緒にやることも大事だと思います。そういったことも踏まえ、本年度、私は「つながり」というテーマを持って活動しています。今回は尚志高等学校サッカー部とのつながりをきっかけに、尚志高等学校の試合を観戦に行くなどのつながりを構築したいと考えています。サッカーを通じて、仲村様の今後の展望についてお聞かせください。

仲村 福島県は東日本大震災があり、数ヶ月サッカーができない時期がありました。サッカーが好きだからこそ、サッカーができないというのは本当に苦い経験でした。しかし、そこからさまざまなことを考えるようになり、震災後から「福島復旧・復興祈念サッカー大会」という大会を毎年開催しています。県外からもサッカーを通して復旧・復興をしようと、福島に来て協力していただいております。また「JVILLAGE CUP」も私が発起人となり立ち上げ、今では日本一の大会になりつつあります。日本一の大会を作ることは、私一人の力では出来ません。今ではU-十八日本代表やU-十七日本高校選抜、Jリーグの下部組織、アメリカのチームが来てくれるなど、本当に素晴らしい大会ができたと思います。それもJヴィレッジの代表でもある内堀雅雄福島県知事が震災の復興はJヴィレッジから、というストーリーを作っていただけました。そして私たちに協力していただけるスポーツメーカーのプーマ様やプロ選手、卒業生など多くの方たちがつながっていくことでこの大会が成立しています。現状維持ではなく、来年はもっとビッグネームのチームを呼ぼうとか、形になっていくことで盛り上がり、本当につながりって大切だと感じています。今、私の一番のテーマとして取り組んでいるのが「食育」です。物価が高騰し、寮生活で食べ盛りの子ども達がお米や野菜などがたくさん食べられないという状況にあります。農産物直売施設で売れなくなった野菜をいただいたり、農業協同組合でインターンシップをやらせていただいたり、その中で地域の方々にご協力いただきながら子どもたちが十分な食事をし、試合に勝つことで感謝の気持ちを伝え恩返しができるのではないかと思っています。

佐久間 そのような取り組みは地域ぐるみで子どもたちのためにこれからも行っていただきたいです。私たち大人が、子どもたちに愛情を持って感謝を伝えたり、行動をしたりすることで、高校生だとしても感謝された経験があれば、卒業してプロの選手になったり、さまざまな道に進んだりしても、社会で成功していくと思います。

仲村 高校サッカーでは必ずテーマに「感謝」が入ります。選手権においてもスタジアムの運営から裏方まで全て負けたチームの選手が行っています。そのような状況下でプレーさせていただけることに感謝しようと選手たちに伝えています。

佐久間 私は「伝える」ということの大切さを感じながら行動しています。「言う」と「伝える」は異なりますし、伝える以上はこちらの責任も伴います。そこでフォローできるからこそ、双方により深い絆が生まれると思います。そういう意味でも、私たち青年会議所がたくさんの方と手を取り合い、つながりを構築していきたいと考えています。是非、私の憧れでもあります国立競技場のピッチで尚志高等学校サッカー部が全国制覇をすることを祈念いたします。そしてこの郡山から、青年会議所メンバーも一緒に応援に行くことができたら良いなと思います。全国制覇した時には郡山、福島全体が喜び、そんな未来が見えたら素敵だと思います。仲村様最後に本対談を通して一言、市民の皆様にメッセージをお願いいたします。

仲村 私が常に思っているのは高校サッカーの指導者として全うすることです。理由は高校生には変化する素質を秘めているからです。彼らはお金をいただいてプレーしている訳でもなく、家族への感謝や、チームの目標のために一生懸命やっています。その姿を見て市民の皆様は感動するのだと思います。「全国制覇」という目標に向かって一生懸命プレーする選手の姿を市民の皆様に観ていただけましたら幸いです。

佐久間 仲村様、本日は長時間に渡り誠にありがとうございました。

ホームページQR

プロフィール

仲村 浩二氏

千葉県出身。習志野高校では日本高校選抜に選ばれ、卒業後は順天堂大学に進学。

大学時代にはバルセロナ五輪予選の日本代表メンバーに選ばれ、五輪予選での日本人最年少ゴール記録保持者。大学卒業後は福島FC、FCプリメーロでMFとして活躍。

一九九八年尚志高等学校サッカー部監督に就任後、二〇〇六年に創部九年目で全国高校サッカー選手権大会に初出場。以後、第九十回、第九十七回全国高校サッカー選手権大会でベスト四進出に導き、現在に至る。

高円宮杯 JFA U-十八サッカープレミアリーグ

高円宮杯 JFA U-十八サッカープレミアリーグは、二種登録されている約三九〇〇チーム（二〇二三年度）のうちJリーグのユースチームと高校のサッカー部から二十四チーム（「EAST」と「WEST」に分かれる）のみが参加できる日本の高校年代（U-十八）で最高峰のサッカーリーグです。

下部リーグとして、九地域それぞれに「高円宮杯U-十八プリンスリーグ」がある。

新年会

一月十五日（水）、郡山ビューホテルにて「公益社団法人郡山青年会議所二〇二五年度新年会」を開催しました。佐久間理事長の新年の挨拶とともに、本年度スローガン「Bridging the future～希望をつなぎ、郡山の未来を創ろう～」に込められた熱い想いを伝え、「郡山を切り開くためには郡山青年会議所会員一人ひとりが地域の可能性を信じ、行動していくことが必要である。また希望をつなぎ、郡山の未来を創造することが明るい豊かな社会の実現につながる」と力強く決意を表明しました。

多数のご来賓の皆様にご出席いただき、四名様よりご祝辞をいただきました。

福島県知事
内堀　雅雄　様
代理　福島県県中振興局　局長
小貫　薫　様
郡山市 市長
品川　萬里　様
郡山商工会議所 会頭
滝田　康雄　様
代理
今泉　守顕　様
公益社団法人日本青年会議所 副会頭
安井　琢磨　君

鏡開きを行い、公益社団法人日本青年会議所東北地区福島ブロック協議会会長　永橋　洋平　君のご発声で乾杯となりました。

歓談中はご来賓の方々や県内各地青年会議所メンバー、郡山青年会議所ＯＢ会会員の皆様と終始和やかな雰囲気のなか、活発に交流が行われました。その後、本年度役員メンバーが登壇し、力強く一年間運動・活動を展開していくと述べました。

会の終盤には皆様と一緒に「若い我等」を斉唱し、郡山青年会議所ＯＢ会会長　有賀　隆宏　様による中締めにて閉会となりました。

本年度の新入会員は初の対外向け事業とあり、終始緊張した面持ちでしたが、郡山青年会議所の法被を羽織り、青年経済人らしく元気な声でお出迎えとお見送りをしていました。また、多くのご来賓の皆様より激励のお言葉をいただき、二〇二五年度の運動・活動に対する気運がより一層高まりました。

年始のご多用のなか多くのご来賓、県内各地青年会議所、郡山青年会議所ＯＢ会の皆様にご臨席賜り誠にありがとうございました。

京都会議

一月二十四日（金）から一月二十六日（日）にかけて佐久間理事長をはじめとする三十七名のメンバーで京都会議に参加しました。

■一日目　一月二十四日（金）

初日は午後から（公社）日本青年会議所　東北地区協議会の第一回会員会議所会議にオブザーブ参加しました。冒頭、当青年会議所より出向しています柳沼　勝恵　会長より挨拶があり、東北地区協議会の経験豊富なメンバーでＬＯＭの悩み事を一年間しっかりサポートしていく旨の力強い内容の話がありました。その後、東北青年フォーラム主催主管締結式が行われ主管ＬＯＭである（一社）秋田青年会議所が大会のＰＲを行い、開催にかける熱い意気込みを感じることができました。その夜に開催されました東北地区ナイトでは東北地区協議会　二〇〇〇年度　会長であります福内　浩明先輩による乾杯の挨拶から始まり、二〇二五年度役員紹介や各地ブロック協議会紹介が行われ、福島県からの出向者が登壇すると、県内各地会員会議所メンバーから大きな歓声が上がり、絆の深さを感じることができました。

■二日目　一月二十五日（土）

二日目は株式会社Ｔ・Ｎゴン　代表取締役　北野　武　氏による共創フォーラムに参加しました。北野氏自身が映画監督として日本と海外の価値観の違い、さらにはご自身の理想の掲げ方について語られました。最後に全国の青年会議所メンバーへのメッセージとして「計算せず、自身のやりたいことを続けることが大切です」という力強いメッセージを頂戴いたしました。その後、当青年会議所から日本青年会議所　ＪＣプログラム委員会へ出向しています大越　惇平　君　安藤　礼重　君　増子　千晶　君　渉外委員会へ出向しています髙橋　章太　君へ激励の挨拶に伺いました。各出向メンバーが委員会先で能動的に行動し、輝いている姿が印象的でした。その日の夜は姉妹ＪＣである（一社）奈良青年会議所の皆様と合同ＬＯＭナイトが開催されました。（公社）郡山青年会議所　佐久間理事長の挨拶では「昨年は姉妹締結五十〇周年を迎えましたが本年は五十一年目を迎え、より強固なつ

ながりを持ってお互いに良い運動・活動ができるように切磋琢磨してまいりましょう」と話がありました。歓談中には郡山青年会議所と奈良青年会議所の二〇二五年度新入会員による挨拶も行われ、終始和やかな雰囲気のなか閉会となりました。

■三日目　一月二十六日（日）

最終日となる三日目は早朝より、京都国際会館メインホールで新年式典が開催され、第七十四代会頭 外口 真大君より「Raise Your Flag～理想への挑戦～」をスローガンに二〇二五年度の所信が発表されました。全国各地の青年会議所メンバーへ理想の未来を目指し、行動を起こすことの大切さを力強く発信され閉会となりました。今回の遠征を経て、郡山青年会議所メンバー一人ひとりが理想を描き、行動を起こしてまいります。

一月例会並びに定時総会

一月二十九日（水）、郡山ビューホテルアネックスにて「公益社団法人郡山青年会議所二〇二五年度一月例会並びに定時総会」を開催しました。

■一月例会

例会では第六十五代理事長 佐久間 悠治君が「Bridging the future～希望をつなぎ、郡山の未来を創ろう～」のスローガンのもと、二〇二五年度の運動・活動に対する想いを話し、一月に開催された事業と対応にあたった委員会に対する御礼の言葉がありました。メンバーに向けては「例会や各種事業に参加されるのであれば、ただ漠然と参加するのではなく目的意識を常にもって参加し、自身の成長につなげてください」と力強く発信しました。

会務報告、出向者報告では各委員長、各出向者より本年度の抱負と一月の運動・活動報告を話しました。

その後、二〇二五年度新入会員の入会許可証授与式が行われ、新入会員一人ひとりが自己紹介を行いました。

■一月定時総会

OB会会長 有賀 隆宏 様よりご挨拶をいただき、定時総会開催のご祝辞と本年度の運動・活動に対する激励のお言葉をいただきました。

定時総会の議長には平方 貴之君、副議長に小桧山 亮太君が選出され、スムーズな議事進行により全議案に対し、全員賛成にて可決承認されました。

会の最後には理事長 佐久間 悠治君より二〇二四年度理事長 織田 陵平君に感謝状が贈呈され、郡山青年会議所発展のために尽くされた功績をメンバー全員で称えました。

新春のつどい

二月八日（土）、郡山ビューホテルにて「（公社）日本青年会議所　東北地区　福島ブロック協議会　二〇二五年度新春のつどい」が開催されました。

■アカデミー開校式

塾生一人ひとりが登壇し、郡山青年会議所から出向しています新城英之 委員は「不撓不屈の精神をもつ人になる」をスローガンとして掲げ、熱い意気込みと決意を表明しました。馬場 菜里委員も出向しており、「福島を語れる人になる」をスローガンに1年間出向先で学びを得ます。

■理念浸透セミナー・運動構築セミナー

（公社）日本青年会議所　二〇二四年度　顧問　菅野　譲 先輩を講師に青年会議所の理念などについて貴重な講話をいただきました。

その後の運動構築セミナーではLOMの垣根を越えたグループワークを行い、県内のLOMをピックアップし、そこで抱えている問題点をどのようにして解決するのか議論をして発表を行いました。普段なかなか交流のない県内各地のLOMメンバーとグループワークを通じて交流を深めることができました。

■ブロック大会主催主管締結式

福島ブロック協議会最大の運動・活動の発信の場である「第五十五回福島ブロック大会in浪江」のPRが行われました。ブロック大会実行委員長のもと、会場全体でシュプレヒコールが行われました。

■新春のつどい

永橋　洋平 ブロック会長より本年度のスローガンである「Try & Glow up!－仲間とともに未来を描こう－」が発表され、県内十六LOMのメンバーと大きなうねりを生み出していくと力強く発信されました。

その後、佐久間理事長が開催地理事長として挨拶をし、郡山青年会議所の紹介とブロック協議会に対する想いを話しました。

LOMスローガン発表では佐久間理事長と武田専務が登壇し、「Bridging the future～希望をつなぎ、郡山の未来を創ろう～」のスローガンを発表しました。

二月例会

二月二十五日（火）、郡山市労働福祉会館にて「公益社団法人郡山青年会議所　二〇二五年度二月例会」を開催しました。

本例会よりセレモニーは新入会員により行われ、はじめてのセレモニーに緊張をしながらもしっかり勤め上げました。

理事長挨拶では二月事業の御礼と四月例会並びにチェリーパーティーに積極的に参加し、OB会の先輩方と貴重な交流の機会を経験していただきたい話をしました。

その後、各委員会の会務報告と出向者報告が行われ、二月の運動・活動の振り返りと三月の事業に向けた意気込みを述べ、出席したメンバーへの情報が共有されました。

新入会員オリエンテーション並びに現役会員向けセミナー

三月一日（土）、三月二日（日）の二日間にかけて磐梯熱海温泉華の湯にて「新入会員オリエンテーション並びに現役会員向けセミナー」を開催しました。

■一日目　三月一日（土）

基礎研修

常任理事メンバーより郡山青年会議所の基礎となるテーマについて説明がありました。

山本副理事長：ＪＣの基本理念、ＪＣ運動、三信条について

長尾副理事長：郡山青年会議所の歴史と伝統、活動について

大越副理事長：用語、定款、諸規定について

柳沼出向役員：公益社団法人日本青年会議所並びに出向について

二〇二五年度各室及び委員会事業説明

室長並びに委員長より各室、各委員会の事業説明が行われ、新入会員は組織構成について熱心に耳を傾けていました。

二〇二四年度褒賞受賞者スピーチ

二〇二四年度最優秀JAYCEE受賞者である橋本　源矢　君と増子　千晶　君による体験スピーチが行われました。新入会員に向けて自身の体験をもとに、ひたむきにＪＣ運動・活動に取り組む大切さを話しました。

理事長講話・セミナー

新入会員は別会場にて佐久間理事長が青年会議所で経験した話などを聞く理事長講話に臨みました。新入会員から佐久間理事長にＪＣ運動・活動での困難をどのようにして乗り越えたのかなど積極的に質問をしていました。現役会員は別会場にて郡山青年会議所ＯＢ会会員であります、安藤智重　先輩を講師に「郡山の歴史と文化を次世代につなげる」をテーマにセミナーを行いました。セミナーでは郡山の歴史と文化を確認し、次世代に正しく語り継ぐ必要性を学びました。

現役会員向けセミナー

講師として（公社）日本青年会議所二〇二五年度　関東地区協議会　会長である渋谷　巧　君を講師に、「青年会議所における資質向上と会員拡大の意義と目的」をテーマに二部構成でセミナーを行いました。自身の体験談をもとに、ＪＣで学べる五つの奥義や会員拡大に取り組む必要性について学ぶ機会となりました。

三分間スピーチ

「VUCA」や「蛇化現象」、「ワンステップフェスティバル」など様々なテーマに対して新入会員がスピーチを行いました。その場でテーマを与えられるため、新入会員はその場で考えを巡らせながら三分間スピーチをしました。

青春の居酒屋

有賀　隆宏　ＯＢ会会長をはじめ、過去の周年事業で先頭に立ってご活躍されました、幕田　宙晃先輩、石川　直哉先輩、菅野　貴先輩を亭主としてお招きいたしました。先輩達より歴代ＯＢ諸先輩へ感謝の気持ちを持ち続け、失敗を恐れず行動することの大切さをお話いただきました。

■二日目　三月二日（日）

新入会員特別研修

新入会員がＪＣ宣言文と綱領の唱和を行い、登壇から唱和、降壇までの一連の流れを審査員にチェックいただき、全員合格することができました。

新入会員決意表明

二日間の新入会員オリエンテーションで学んだ内容を決意表明文に盛り込み、将来のＪＣマンとしての理想像を決意表明文を通して声高らかに読み上げました。

修了証書授与

二日間に渡り行われた新入会員オリエンテーションを修了した証として、修了証書が佐久間理事長より手渡されました。新入会員はもちろんのこと、現役会員にとっても非常に有意義な二日間となりました。

三月例会

三月二十四日（月）、郡山市青少年会館にて「公益社団法人郡山青年会議所二〇二五年度三月例会並びに会員親睦会～みんなでボッチャ！～」を開催しました。

理事長挨拶では三月事業の御礼と本年度の取り組みである「合同例会」の意義について話をしました。近年、メンバー間の接点が希薄化してる中で合同例会を開催することでメンバー間のつながりが広がり、ＬＯＭに良い波及効果が生まれると語りました。その後、会務報告と出向者報告が行われ、閉会となりました。

例会後の会員親睦会では近年注目を浴びているニュースポーツ、「ボッチャ」をチーム対抗戦で行いました。試合を重ねるにつれて各チーム内でどこを狙うかなど自然と会話が生まれ、佐久間理事長の想いである役職や委員会の垣根を越えた交流を図れる機会となりました。

第六十四回「久米賞・百合子賞」第一回実行委員会

四月二十二日（火）、郡山市役所本庁舎五階の教育委員会室にて、第六十四回「久米賞・百合子賞」第一回実行委員会を開催しました。

佐久間理事長の挨拶では「久米賞・百合子賞」は郡山青年会議所誕生と共に歩んできた歴史と伝統のある事業であり、本年度は昨年度以上の応募総数を目指すと話しました。

実行委員会では佐久間実行委員長の進行のもと、今年度の「久米賞・百合子賞」のスケジュール、予算などを打ち合わせし、無事に承認いただくことができました。

四月例会並びにチェリーパーティー

四月二十三日（水）、郡山ビューホテルアネックスにて「公益社団法人郡山青年会議所四月例会並びにチェリーパーティー」を開催しました。

■四月例会

佐久間理事長の挨拶では三月事業の御礼とチェリーパーティーで積極的にOBの先輩方と名刺を交換し、交流が図れる機会につなげて欲しいと話がありました。その後の会務報告では青少年育成委員会によるわんぱく相撲PRが行われ、事業が本格化する様子が伺えました。

■チェリーパーティー

四月例会後に郡山青年会議所OB会の先輩方との交流事業として「チェリーパーティー」を開催しました。冒頭、有賀隆宏OB会会長挨拶ではチェリーパーティーの歴史についてお話いただきました。その後、織田直前理事長による乾杯挨拶で会がスタートし、OB会の先輩方と名刺を交換するなど交流を深め、多くの気づきや学びを得る機会となり大変有意義な時間となりました。

第六十回郡山市こどもまつり

五月五日（月）、AGCエレクトロニクス郡山カルチャーパークにて「第六十回郡山市こどもまつり」を開催しました。

郡山市こどもまつりは昭和四十一年に（社）郡山青年会議所が立ち上げた事業で、未来を担う子どもたちが心身ともに健やかで元気いっぱいの笑顔となる機会を創出するために、本年度もブース出展を行いました。

出展しました「風船うちわリレー」と「コーンホール」には多くの子どもたちが集まり、親子で協力し合いながら風船を運ぶ様子や、郡山青年会議所メンバーと触れ合いながら楽しそうにコーンホールに挑戦する様子を見ることができました。

アンケートのお願い

本誌や当団体へのご意見やご感想をお寄せください。

郡山青年会議所では本誌や当団体に対するご意見やご感想を募集しています。記載のQRコードから回答いただくか、FAXやハガキに左記項目を明記してお送りください。

- ●性別 ●年齢 ●関係者か否か
- ●興味・共感を持った記事または事業
- ●本誌や当団体へのご意見・ご感想
- ●当団体にやってほしい事業

〈宛先〉
公益社団法人郡山青年会議所
広報渉外委員会宛
〒963-8004 福島県郡山市中町5-17 中町スペース3F
FAX：024-932-2857

※ご記入いただいた個人情報は誌面を充実させることや事業へ役立てること以外の目的で使用いたしません。

アンケートQRコード

新入会員紹介

越後（えちご） 遼（りょう）
損害保険ジャパン株式会社

Vol・617号
●発行所事務局 公益社団法人郡山青年会議所 福島県郡山市中町5-17 中町スペース3F 電話024-932-2289
●発行責任者／理事長 佐久間 悠治 ●編集責任者／広報渉外委員会委員長 圓谷 紀幸
※無断転載禁止